様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月　６ 日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ００００３１

研究課題名（和文）バウムガルテン「自然神学」との関係から見たカント神学の研究

研究課題名（英文）Research on Kant's theology from the viewpoint of the connection with Baumgarten's "natural theology"

研究代表者
檜垣　良成（Higaki, Yoshishige）

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：１０２８９２８３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：　カントの神学講義を、アレクサンダー・ゴットリープ・バウムガルテンの『形而上学』における「自然神学」との関係から検討した。その成果として、道徳および宗教についてのカントの理論は、神の知性および意志についての彼の考察との脈絡においてより明瞭に理解されうるということが判明した。
　また、カントの「確信」としての「理性信仰」という概念がもつ真の意味も、「真とみなすこと」としての「知」との対比において明らかにされた。理性信仰はあらゆる知よりも堅固であり、その確信こそが可能な確信の中で最大のものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　理論哲学、実践哲学、そして神学まで、ヴォルフ主義哲学との対決という観点で一貫してカントを研究してきたが、長年にわたってこうした観点で一貫してなされた研究は見当たらない。
　また、国内でも若い研究者によるカント神学研究は現われてきているが、神学そのものへの関心からの研究であり、国外を見ても、神学のテクストはやはり神学的関心からのアプローチのものが大半を占める。本研究は、あくまでも人間理解の対称軸として、カントの神学を検討したものであり、その成果は、宗教に特段の関心をもたない人々にとっても十分意義のあるものとなった。

研究成果の概要（英文）：　I examined Kant's lectures on theology in relation to Alexander Gottlieb Baumgarten's "natural theology" in his Metaphysica. The result of the examination was that Kant's theory of morality and religion can be understood more clearly in the connection with his consideration of God's intellect and will.
　The true meaning of Kant's concept "Vernunftglaube" (rational faith) as "Ueberzeugung" (belief) was also discovered in contrast with his concept “Wissen” (knowledge) as "Fuerwahrhalten" (holding-to-be-true). The rational faith is firmer than all knowledge, its belief is the greatest possible.

研究分野：人文学

キーワード：哲学　バウムガルテン　カント　神学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

カント哲学のコンテクストとしてのヴォルフ主義哲学に着目しながら、カントの哲学形成について研究してきて、カントの近代合理（理性）主義批判は、「実在」を「概念」に還元する合理（理性）主義者たちの「理性」ないし「知性」の偏重に対する批判というよりはむしろ、「理性的」ないしは「知性的」なものと「感覚的」なものとの混交に対する異議申し立てと見たほうがよい（まさに「純粋」理性の批判）ということが明らかになっていた。こうした批判は、確かに「理性」や「知性」の限界を確定してしまうものであるが、それと同時に「神」のみに許されていた上級認識能力の真の「純粋性」を「人間」に確保するものでもある。

実践哲学に関しても、バウムガルテンの「経験的心理学」における広義の自由の能力（1.「自発性」、2.「ヴィルキューア」、3.（狭義の）「自由」）の区別をベースにして、カントの「ヴィルキューアの自由」を解釈し、この自由が「選択の自由」を意味しないこと、そして、カントはバウムガルテン以来の「理性によって規定される」という意味での「自由」を一貫して「純粋」化していったにすぎないということも判明していた。

次いで、ほとんど顧みられることがなかったバウムガルテンの「自然神学」のテクストも検討し、「概念」が「実在」を吸収する合理（理性）主義の思想は、やはり彼において頂点に達していることが、神学のテクストにおいても裏づけられた。今回の研究は、このようなバウムガルテンの「自然神学」のテクストに具体的に言及しながら進行するカントの神学講義を検討するものである。

２．研究の目的

本研究は、あまり顧みられることのないカントの神学講義の内容を、その授業のテキストであったバウムガルテンの『形而上学』第4部「自然神学」の内容と対照させて正確に読み解き、カントがバウムガルテンに対して言わんとしたことをカントの理性批判（理論と実践の両面において）のより正確な理解のために役立てるものである。

本研究は、カント神学を神学的関心から取り扱う研究ではない。周知のごとく、カントの批判哲学は人間理性を批判しており、神については本来の理論的認識は望めない。それにもかかわらずカントが神学を講義したのは、神について否定神学的に考察することを通して、逆に人間のことがより正確に明らかになるからである。こうした点を強く意識しながら、神学講義を読み解くところに本研究の特徴があるが、それのみならず、この研究は、ヴォルフ主義哲学との対決のコンテクストを踏まえた筆者の長年にわたるカント研究を補完するものでもある。

カントの批判哲学は、物自体の認識を断念し、理論と実践を分断させたものとして、消極的に評価されることもあるが、その批判は彼が思想を限界まで突き詰めた果ての苦渋の決断であることを筆者は前批判期との対比において明らかにしてきた。今回は、神学講義という批判哲学らしからぬテクストの中に、カントの批判哲学が浅薄なものではなく形而上学的に十分に吟味され尽くした果実である証拠を見いだしたい。

３．研究の方法

現存するカントの神学講義のテクストは５つであるが、いずれも批判期である1783/4年の同じ講義の筆記ノートと言われている。断片的なCoingとMagathのものを除く３つのテクスト（Pölitz, Volckmann, Danzig）を比較対照したKurt Beyer, *Kants Vorlesungen über die philosophische Religionslehre* (Halle: Akademischer Verlag, 1937) を参照しながら、やはりImmanuel Kant, *Vorlesungen über die philosophische Religionslehre*, anon. edited by Karl H. Ludwig Pölitz (Leipzig: Carl Friedrich Franz, 1817) を中心に、カントの神学を検討してゆきたい。

その際、Immanuel Kant, *Lectures on Philosophical Theology*, translated by Allen W. Wood and Gertrude M. Clark, with an Introduction and Notes by Allen Wood (Ithaca: Cornell University Press, 1978) および Immanuel Kant, *Religion and Rational Theology*, transl. and edited by Allen W. Wood and George di Giovanni (Cambridge: Cambridge University Press, 1996) を参照するほか、最近出版されたDanziger Heftの英訳研究本Johann August Eberhard and Immanuel Kant, *Preparation for Natural Theology: With Kant's Notes and the Danzig Rational Theology Transcript*, transl. and edited by Courtney D. Fugate and John Hymers (London: Bloomsbury, 2016) も検討する。

具体的な考察において中心となる対象は、神の「知性」と「意志」と「気に入り」(Wohlgefallen) である。カントは人間の３つの心の能力、すなわち、「認識能力」（特に知性（理性））、「欲求能力」（特に意志）および「快・不快の感情」と対照させる形で神を考察しているので、神の能力をどのように考えざるをえないのかを、バウムガルテンとの対比において正確に明らかにすることを通して、逆に人間の「知性」（理性）、「意志」、「（尊敬）感情」がカントによってどのように理解されているかが、単に公刊著作だけを検討する場合よりも、より判明に明らかになる。こういう仕方でカントの理性批判解釈において不分明な部分を減らすことが本研究の目的である。

４．研究成果

（１）カントの「人間の知性」論は『純粋理性の批判』に見いだされるが、「神の知性」論の検討は、神学講義によらなければならない。神の知性を人間の知性と比べた際に、まず確認されることは、人間の知性が「抽象的」にしか認識できないのに対して、神の知性は「直観的」であり、具体的に認識するはずであるという点である。カントは、既に前批判期において「抽象」と「捨象」との区別に注目し、「抽象」によっては「厳密な普遍性」は期待できないことを喝破していた。もちろん、「捨象」による「実在的」知性認識は批判期においては断念されるが、批判期の理論哲学においても純粋な知性認識は堅持され、なおかつ、プラトン以来の内容的に固定された普遍的対象の前提が払拭されている点は特筆されてよいことだと思われる。こうした点をまとめて、哲学・思想学会第 39 回学術大会にて口頭発表を行なった。

（２）ヘーゲルによって「空虚な形式主義」、「抽象的な無規定性の確立」と揶揄されてきたカントの定言的命法の思想であるが、この批判はカントの神学思想まで射程に入れれば、いささか的外れであることが明らかになる。カントが想定していた道徳法則は無内容ではない。同一の法則のもとに立つ神の意志を考えてみれば、そのことは分かる。ただ人間にとっては、道徳法則はさしあたり抽象的に定言的命法として意識され、経験によって鋭くされた判断力によって形成された格率の普遍化可能性の検討を通してその内実に迫ってゆくしかないのである。このことは、カント倫理学の欠陥ではなく、むしろ人間の理性の有限性を強く自覚した者の責任の担い方を表現しているのである。こうした研究成果を論文にまとめ、また日本カント協会第 43 回学会にて口頭発表した。

（３）カントの「人間の意志」論は『実践理性の批判』等に見いだされるが、「神の意志」論の検討は、神学講義によらなければならない。西洋哲学は、普遍的な知の対象こそが本当に存在する実在であると考えてきた。プラトンのイデアがその典型であるが、アリストテレスの形相やトマス・アクィナスの本質という思想も、その真髄を継承したものである。しかし、このように普遍的な知の対象を内容的に固定して実在させる発想は、神学的観点から見て中世において問題視されることになる。一度創造された本質が不可変的であることは、神の意志を考慮すると許容し難いからである。このノミナリズムの論点は、主に英国経験主義に継承される。

カントは、経験主義と理性主義という対立軸で見るならば、決して経験主義に与することはなく、純粋理性の実在性を死守しようとした哲学者であるが、普遍実在論とノミナリズムという対立軸の中で再考察するなら、むしろノミナリズムに与しているということが明らかになった。Sein に関するテーゼに現われる「レアールな述語」は、従来、「何であるか」の観点から捉えられた述語であると見なされてきた。しかし、そういう解釈では、分析的判断と綜合的判断との真の区別は明らかにならない。こうした点に注目して、カントの、ノミナリズムとの対決について日本カント協会第 44 回学会にて発表を行ない、また、レアールな述語と綜合的判断の思想の新解釈を論文にまとめた。

（４）バウムガルテンの『形而上学』第３部「心理学」における「上級欲求能力＝意志」、「自発性」、「随意欲求能力」、「自由」の理解を再検討した上で、第４部「自然神学」における「神の意志」の「自由」についての考察を深めた。合わせて、カントにおける「神の意志」の「自由」について、前批判期の諸著作と神学講義を検討した。その結果、明らかになったことは、以下のことである。

カントは最初期の『形而上学的認識の第一諸原理の新解明』（1755 年）において、人間の意志が決定されていることを認め、それでも、「最善なるものの表象と合致するように規定された」「内的原理から発する活動」（自発性）は「自由」であると見なした。通説によれば、この後、カントは第三アンチノミーの問題に気づいて、単なる「自発性」ではない宇宙論的に解釈された「絶対的自発性」としての「超越論的自由」に思い至り、かつての自身の思想を乗り越えたとされる。しかし、『純粋理性の批判』（1781/87 年）の第三アンチノミーの議論でカントが明らかにしたことは、現象としての自然因果的な決定のうちにない自発性の可能性にすぎない。知性や理性によって意志が規定されることをこそ「自由」と呼ぶ考え方は前批判期から一貫して維持されている。

もちろん『道徳形而上学の基礎づけ』（1785 年）以降のカントは、この理性の純粋性の厳格化を試み、自律の思想を突き詰めた。しかし、彼の「自由」概念は、その後の『単なる理性の限界内の宗教』（1793 年）に至るまで、本質的に一貫したものであることが、彼の神学講義における神の自由についての考察から改めて裏づけられた。

以上の研究成果を日本カント協会第 45 回学会にて口頭発表し、また論文にまとめた。

（５）バウムガルテンの『形而上学』第４部「自然神学」における「神の道徳的属性」論を再検討した上で、カントにおける「神聖性」（sanctitas, Heiligkeit）、「慈善性」（bonitas, Gütigkeit）、「公正さ（正義）」（justitia, Gerechtigkeit）について神学講義を検討した。

バウムガルテンにおいて「慈善性」とは、「別のものに対してよく行おうとする意志の規定」（『形而上学』§903）である。そして、「公正さ」とは、「諸々の人格ないし精神に対して比例的

な慈善性」（§906）である。カントは、この規定を名目的には受け継ぎながら、「神聖性」というものを「意志の絶対的ないし無制限的な道徳的完全性」（VIII 1075）と規定して、神において神聖性が慈善性の制約でなければならない点を強調する。これは、最高善における道徳性と幸福との関係に対応しており、人間において道徳性が幸福の制約であることは、神の道徳的属性の構造と連動しているのである。そして、幸福の分配が道徳性に比例していることが、神の公正さ（正義）である。

カントにおいては、道徳法則は神の意志の根拠であり、道徳法則が神の意志から導出されるわけではない。神が恣意的に意志したことがそのまま道徳法則になるのであれば、神は道徳法則の「立法者」であると同時に「創始者」であることになるが、そうであるならば、神聖性と慈善性との区別は判然としないであろうし、両者の比例関係にもとづく神の公正さ（正義）も最高善も成立しないであろう。

（６）カント哲学における「真とみなすこと」（Fürwahrhalten）という概念は、ゲオルグ・フリードリヒ・マイアーの『理性論（論理学）』に見いだされる「真とみなす」（für wahr halten）や「確信」（Überzeugung）の問題を継承したものであると見なしうるが、カントは「信（信仰）」（Glaube）という観点に重点を置いて、その概念に独自の深化をもたらした。

『純粋理性の批判』超越論的方法論の「純粋理性のカノン」において、「思念すること」（Meinen）、「信じること」（Glauben）、「知ること」（Wissen）という 3 つの「真とみなすこと」が展開されているが、「知ること」は「信じること」を前提としている。なおかつ、カントは、神と来世の存在に対する信の不可避性を説明するのみならず、この信が客観的な根拠をもたないが故にこそ、「実践的信」という「確信」はすべての「知ること」よりも堅固であり、「実践的確信」こそが、可能な「確信」の中で最大のものであると言う。なぜなら、客観的根拠をもつ「知ること」は、常に反対の根拠も考慮せねばならないものであるが、「実践的に信じること」は、私自身の「関心」に基づくものであるから、揺らぎようがないからである。この関心が実践的たらしめているのは、論駁不可能な道徳法則に従った私の目的の想定の制約（神および来世）への信仰であり、これがすなわち「理性信仰」なのである。以上のような研究成果を日本カント協会第 46 回学会にて口頭発表し、また論文にまとめた。

（７）「真とみなすこと」は、「知」の問題においてのみならず、カント実践哲学の最重要概念とも言いうる「誠実性」（Redlichkeit）の理解においても重要な役割を演じることが、『弁神論におけるあらゆる哲学的試みの失敗に関して』（1791 年）における「真（wahr）であること」と「真実（wahrhaft）であること」との区別から判明した。この役割の解明が今後の課題である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 檜垣良成	４．巻 46
２．論文標題 意志の自由とは何か――カントにおける絶対的自発性と純粋理性による規定――	５．発行年 2021年
３．雑誌名 哲学・思想論集	６．最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15068/0002000217	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 檜垣良成	４．巻 38
２．論文標題 カントと「何であるか」の問い――レアールな述語と綜合的判断――	５．発行年 2020年
３．雑誌名 哲学・思想論叢	６．最初と最後の頁 71-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 檜垣良成	４．巻 70
２．論文標題 カント道徳法則の具体性－神の意志と人間の意志－	５．発行年 2018年
３．雑誌名 哲學（広島哲学会）	６．最初と最後の頁 41-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 檜垣良成	４．巻 47
２．論文標題 カントの「確信」概念――真とみなすことと理性信仰	５．発行年 2022年
３．雑誌名 哲学・思想論集	６．最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15068/0002003574	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 檜垣良成
2．発表標題 カントの「意志の自由」概念――『新解明』から宗教論へ――
3．学会等名 日本カント協会第45回学会
4．発表年 2020年

1．発表者名 檜垣良成
2．発表標題 レアールな述語とは何か――ノミナリズムとの対決――
3．学会等名 日本カント協会第44回学会
4．発表年 2019年

1．発表者名 檜垣良成
2．発表標題 カントと普遍性
3．学会等名 哲学・思想学会第39回学術大会（招待講演）
4．発表年 2018年

1．発表者名 檜垣良成
2．発表標題 カントにおける普遍性と道徳法則－人間の知性と神の意志－
3．学会等名 日本カント協会第43回学会
4．発表年 2018年

１．発表者名 檜垣良成
２．発表標題 カントと「真とみなすこと」
３．学会等名 日本カント協会第46回学会
４．発表年 2021年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関